

# 「原爆乙女」の物語

中野 和典

## 序

過去に起きた出来事が、現在において何らかの意味を持ちえるのは、その出来事に含まれる問いが、現在においてもなお考えべきものであり続けている場合だけである。原子爆弾が二つの都市の上空に炸裂してから五十余年、それになお立ち返るべき何かがあるのだとすれば、それは原爆をめぐる問いが、そのまま現在の人間が抱えている問いでもあるような、問題の共有が成り立ちえるからに違いない。同時期に生まれた人間に、方や原爆を投下する側に立ち、方や投下される側に立つという決定的に異なる役割を引き受けさせたものは何なのか。なぜ、原爆使用という、見方によっては全く馬鹿げたことが実際に起こってしまったのか（これを「馬鹿げた」とだけ断じることができる人間は、現在自分が組み込まれている状況を見ていないのだろうか）。原爆の出現を回避する方法はなかったのか。これらの問いは暴力や教育や国家などをめぐる今日的な問いと多くの接点を持ち、問題の在りようを明らかにする一方で、より深刻な困難に向き合わせるものでもあるだろう。

そもそも原爆がいかなるものであるかを考えるとき、二つの原爆資料館の展示の仕方は示唆的である。原爆投下以前の街の歴史や光景、爆弾の実物大模型、焼きついた影、なぎ倒された木々、いくつもの建物がかるうじて外観をとどめているだけの焦土、変形した硬貨やガラス瓶、原爆投下にいたる過程を示した年表、戦後の核拡散と威力の強大化の説明図など、多くの資料が原子爆弾について何かを知らせるために展示されている。中でも特に観る者に衝撃を与えるのは、「人体」（の写真や模型）であろう。「人体」は負った傷の生々しい痛みを想像させ、その人間が負っていた時間を想像させる。そして、原爆について何かを知らせる品々は、それと関わりがあった人々のことを想像させるものになったとき、意味ある布置を獲得するのである。「人体」は他の展示物と観る者との間を媒介し、関係を結ばせるものとして機能している。原爆資料館の展示の仕方には、被爆者たちの「証言」も含めて、人間を基点にした関係づけをうながすような志向性がある。原爆を製造し投下したのも、その下にいたのも人間であったということ。全てが計画的で組織的な人為から生まれた原爆という暴力。原爆をどのように記憶するかという問題は、現在も構造的に機能し続けているそのような暴力とどのように向い合うかという問題でもある。

原爆の記憶を考えると、重要な存在として（「体験」を持たない）我々の前に現れるのは被爆者と呼ばれる人々であろう。被爆者は原爆と我々の間に在る。戦後、被爆者の中でも「妙齢」の女性「原爆乙女」と呼ばれ、その象徴的な存在と見なされていた時期があった。彼女たちがそのような役割を担った背景には、あ

る物語化の作用が働いていたようである。どのような言説を通じて「原爆乙女」像は形づくられていったのか、それが原爆を記憶することにどのような影響を与えているのか。本稿ではマスメディア（主に新聞記事）において「原爆乙女」がどのように語られたかについて考察し、そこに働いていた力の在りようを明らかにしたい。

## I 許しと和解―「原爆乙女」の物語化

「原爆乙女」（あるいは「原爆娘」<sup>1)</sup>）が、新聞紙上に登場するようになるのは、敗戦後七年を経過した一九五二年になってからである。この年四月には対日講和条約（サンフランシスコ平和条約）が発効、連合国軍総司令部（GHQ）による占領状態から日本が「独立」し、占領軍によって検閲されていたときには報じられることの無かった原爆被害が公にされるようになる<sup>2)</sup>。同年八月に「アサヒグラフ」がマスメディアとして初めて原爆被害の写真を掲載したことはよく知られている。敗戦後、被爆者たちは身体的・精神的な傷を負ったのに加え、就職や結婚の際に差別を受けることも多かったが、「原爆乙女」たちは疎外される一方で広く同情を寄せられる存在でもあった<sup>3)</sup>。

まず、日本国内における「原爆乙女」の支援がどのように報じられていたかを見ることとする。

**募金** 「原爆乙女」らを経済的に支援する動きがあった。その最も華々しい事例は、芸能人たちによる募金活動である。

「原爆乙女」たちを救うため結成された「ヒロシマ・ピース

・センター東京協力会」では三日夜、東京都千代田区丸の内東京会館で第一回の打合せを行い、芸能界の協力で目標二十万円の募金を行うことをきめた。（略）芸能人代表長谷川一夫、轟夕起子、山口淑子さんらの顔も見え、募金第一回として、きたる十二日から三日間銀座松坂屋で一流芸能人のサイン・サービスを行うことを申し合わせた。手術などの治療費を賄うほか不幸な女性達の将来まで面倒をみたいと同会ではいつている（二十万円の募金 「原爆乙女」に芸能界で協力）

「朝」五二年九月四日<sup>4)</sup>

原爆少女たちに贈るスターたちのサイン募金活動は十二日から十四日まで三日間東京銀座松坂屋で行われ、一流スターたちが入りかわり立ちかわり、ほとんどもれなく参加し、あつせん役の高峰秀子さん、轟夕起子さんらは寸暇をさいて三日間連続で顔をみせ、広島出身の月丘姉妹らも二日間撮影のあいまをみて出席するという熱心さであった。（略）この第一回の募金運動の成績は当初主催者の広島ピースセンター東京協力が予想した金額にはおよばなかったが、それでも約四十万円の純益をあげ、まずまず好成績であった（三日で純益四十万円 原爆乙女への募金好成績「中」五二年九月一五日）

都心で行われた人気芸能人たちの取り組みは、多くの注目を集めたようである。どちらの記事にもある言葉通り、まさに「顔」を見られることを職業とする芸能人たちが、「顔」に傷を負った「原爆乙女」を支援する活動を通じて、彼女らの存在は認知の幅を広げていった。芸能人以外にも画家や作家、一般市民からの募金の記事が見られる。

治療 「原爆乙女」への募金の第一の目的に挙げられるのが、原爆によってうけた火傷や機能障害などの治療である。東京<sup>5</sup>や大阪<sup>6</sup>の大病院における「原爆乙女」の治療の様子が多く報じられている。その治療の支援については、例えば、次のような記事がある。

「原爆患者のよき協力者になろう：」と乗出した作家真杉静枝さんから作家グループの温い心に招かれ「原爆乙女」十名と原爆一号吉川清さん(39)<sup>7</sup>ならびに縁をとりもつた流川教会谷本清牧師らは八日広島発急行「安芸」で上京した。／広島赤十字病院で六ヶ年間の闘病生活から昨年四月ようやく解放された吉川さんは「ケロイド」の傷跡で結婚も就職もできない若い「原爆乙女」十二名とともに更正の道を開こうと昨年九月「原爆障害者厚生会」をつくり、広島ピースセンター谷本清牧師らの好意でミシン三台の寄付をうけ洋裁の技術を身につけながら、互いに励まし合い、いまでは会員も三十名にふえているが、このほど来広した真杉さんが、吉川さんや乙女たちを「東京の専門病院に紹介して、東京見物させよう」と語ったことが実を結び(略)。

(「原爆乙女」ら上京 真杉さんから作家グループの温い計い「中」五二年六月九日)

後に「原爆乙女」の渡米治療において重要な役割を果たす谷本牧師<sup>8</sup>らによる支援の様子が報じられている。「原爆乙女」の治療においては、ケロイドなどの身体的な外傷が重要視されていた。

慰問・手紙 「原爆乙女」に対する慰問<sup>9</sup>や手紙について報じた記事も見られる。

十二日長崎市社会課へ長野県岡谷市立南部中学校の三年一組と三年三組から書留郵便が届いた。中には田川市長と原爆乙女にあてた同中学校三年三組の担任教師をはじめ三年生男女十七名の手紙と現金二千二百二十円が同封されてあった。担任教師が市長にあてた手紙によると同中学校三年生はこのほど映画鑑賞にいったが、そのさいニュースで被爆して十年になるのに下半身不自由で立つことさえできず、ベッドに横たわっている原爆乙女の姿をまのあたりにみて強く心を動かされ「何とか原爆乙女を自分たちの手で助けてあげたい」とそれから二週間、教室に原爆許すまじとしたためた箱を設け救済資金の募集にのり出したもの(「失望しないで明るく生きて：」原爆乙女を励ます長野県のヨイ子が便り)「長」五五年九月一三日)

「原爆乙女」の様子はニュース映画でも紹介されていたようである。「原爆乙女」に宛てられた手紙の中には、結婚を希望するもの<sup>10</sup>や養子にしたい<sup>11</sup>というようなものまであった。

このように、マスメディアを通じて知られるようになった「原爆乙女」の存在が、人々の同情を喚起し、さらにそれを支援する動きが報じられることによって彼女たちは広く知られるようになっていった。

「原爆乙女」と周囲の人々との交流だけではなく、「原爆乙女」どうしの交流も注目された。広島島の「原爆乙女」と長崎の「原爆乙女」の交流については、次のようなエピソードが紹介されている。

原爆の悲劇を一身に受けたヒロシマの乙女たちを救えと昨年七月ピース・センター東京教会がこれら乙女たちを順次東京に招き東大で治療を行うという朗報は世界的反響とよぶとともに地元原爆障害者対策委員会も新春早々発足、近く米国整形医学界治療班招請の具体案が実現化しようとしているとき、廿日深夜、第二原爆都長崎の乙女たちも東京に招かれるという知らせが広島側の原爆乙女たちによせられ、同じ境遇の乙女だけが知る同情と祝福のひとときを氷る広島駅に過ぎた佳話がある。／広島乙女の治療好成绩にピース・センター東京協力会の作家真杉静枝女史は「同じ悲運の長崎の乙女をも：」と昨年田川市長あてに広島同様依頼状を発送、同市長が選考した橋アサ子さん（二三） Ⅱ平戸小屋町、山口美佐子さん（二三） Ⅱ江平屋町、長富郁子さん（一八） Ⅱ西町の三乙女が十九日希望の途に上ったもので、この知らせをうけた広島側は谷本牧師に引率された国村スエさん（二六）ほか六名が花束を抱え、午前十一時二十二分広島駅着急行「うんぜん」の到着を迎え、降り立った三乙女に涙の初対面を交わした。／わずか八分の停車であったが同じ運命の星の下にめぐり合わせた悲嘆の影もなく「よかつたですわね」「わざわざすみません」「ときせぬ思いをただひと言に相通ずるあいさつを交換、広島乙女が心から花束を贈呈、全快を祝福すれば、だれ歌うともなく「冷きさだめ身に負うてさびしく生きる乙女子ほおより消えしほおえみよ、再びいつの日にかえる」とかつて巢鴨戦犯が乙女の幸を祈って贈った「原爆乙女の歌」を合唱して激励、鳴りわたる発車ベルもしばし忘れてに

ぎり合う手と手も離れぬばかりの別離を惜しみ同乗の人々に深い感激を与えた（「早く癒って下さい」原爆乙女、長崎の原爆乙女を激励 駅頭に期せず起る合唱）「中」五三年一月二二日）

治療を受けるために上京する長崎の「原爆乙女」とつかの間の交流を行う広島「原爆乙女」。注目すべきはその語り方である。彼女たちは〈同じ悲運〉〈同じ運命の星の下にめぐり合わせた〉〈同じ境遇〉といった、同じ原爆の悲劇を共有する者として語られ、さらにそれを見守る〈同乗の人々〉が感激を共有して語ったことが報じられる。ここには「悲運」「運命」「悲劇」といった言葉で原爆の人為的な側面が消し去られながら、まず「原爆乙女」どうしが感情を共有しうる者として取り上げられ、それに周囲の人々（さらには新聞の読者）が共感を寄せるといふ構造になっっている。

そのような感情の共有を喚起するものとして重要な役割を果たしているのが、「原爆乙女の歌」である。列車が停まったわずかな数分間の停車のうちに、全く初対面である彼女たちは、それでもひとつの歌を合唱する。この「原爆乙女の歌」については次のような記事がある。

ヒロシマ・ピース・センターでは十二日原爆が広島に投下された午前八時十五分を期し東京で加療中の原爆乙女たち、長崎の原爆乙女たちと相呼応して広島市流川教会で原爆乙女の歌「ほほえみよかえれ」の発表会を催す。「ほほえみよかえれ」は原爆によって刻み込まれたケロイドに苦悩しながらも明るい希望を求めて生きぬいている広島原爆乙女の会員の

人佐古美智子さん（二〇）が作った詩を巣鴨の戦犯楽団小林美千夫<sup>\*12</sup>氏（三四）＝元憲兵曹長、終身刑＝が作曲、東京学芸大学渡辺茂教授の編曲によってできたものである。

（「原爆乙女の歌」発表 話題「朝」五三年二月二六日）

「原爆乙女」が合唱したのは、「原爆乙女」と終身刑を科されていた「戦犯」とが合作した歌であった。その内容は次ぎようなものである。

「ほほえみよかえれ」 作詞：佐古美智子（「原爆乙女」）／作曲：小林

美千夫（「戦犯」）／編曲：渡辺茂

冷たきさだめ 身に負うて 寂しく生きる 乙女子の 頬より  
消えし ほほえみよ 再びいつの 日にかえる<sup>\*13</sup>

ここでも原爆は、ただ「さだめ」として語られ、人為的な側面は消し去られている。ちなみに、「原爆乙女」が制作に携わったものではないが、長崎でも広島に続いて「原爆乙女」の歌が発表されている。

「平和の陰に」 作詞：島内八郎（長崎市博物館勤務） 作曲：木野普

見雄（長崎市議会事務局長）

あの日あの時なればと ねむれず泣いたこともある だけど  
わたしは： 思い返して生きぬいた あゝ長崎の中空に 今日  
も身にしむ サンタマリアの鐘が鳴る…<sup>\*14</sup>

長崎の「原爆乙女の歌」が「祈りのナガサキ」のイメージを帯び

ていることは興味深いが、ここでは広島「原爆乙女の歌」の成立背景に注目したい。「戦犯」と「原爆乙女」が歌を合作する前に二者は巣鴨で対面している。

予めこのことを伝え聞いていた受刑者たちは拘留所正門から本館までの長い舗道につつ立つて感謝を込めたまなざしを送り、本館内の面会室には受刑者約百名が詰めかけ所内で組織された巣鴨楽団が彼女たちを合奏で迎えるという歓迎ぶりだった。／一行を代表して川崎景子（一九） 裏輪豊子（二五）の両嬢が、こもごも「私たちがこういう様子で人前に出るのは世の人々に戦争の悲惨さを認識してもらいたいと思っただけです、帰ったら今日の様子をぜひご家族に伝えます」とあいさつすれば、県人を代表して賀屋興宣氏（元蔵相）が「郷土の皆さんをこういう目に会わせたのはA級戦犯たる私にその罪がある、慰問をしてもらうどころか私こそ皆さんを慰問しなければならぬと思っていたのだが囚の身で……」と自分の娘にでもわび、かつ訴えるような口ぶり。ついで他の府県を代表してめつきり老い込んだ畑俊六元大将も「当時私は広島の陸軍の最高指揮官をしていた、広島は西部日本の中軸で旧敵国がこれを狙ったのは当然です、私どもが広島にいたばかりに皆さんをこういう目にあわせました」と頭を下げる、こうしていつの間にか慰問団の少女たちが逆に慰問されるようになつた。こうになり拘留所内の花園班が花束を持ち込んで来て一人一人を花で飾れば、美術班その他の班から心づくしの画帳などが贈られる。／感にたえかねた新本恵子さん（一九）が「あなた方のせいだなんてちつとも思っていないものに……」

戦争の悪を身をもって体験している私たちをみることで戦争をなくするように努力しましょう」と悪魔の性根を一パイ刻んだ顔を涙でくしゃくしゃにしたおえつする（『私達の責任』頭を下げる受刑者 原爆娘巢鴨を訪問「中」五二年六月一二日）

「原爆乙女の歌」成立の背景には、「原爆乙女」による「戦犯」の慰問という出来事があった。被爆者という「戦争被害者」の代表的存在をさらに代表する「原爆乙女」と「戦争責任者」の代表として拘禁されていた「戦犯」との和解。敗戦後の「日本人」が負っていた二つの役割を代表する両者の間に、謝罪と許しとを通じて和解が成立する。このような出来事を問題視する視点が皆無だったのではない。当時、巢鴨に拘留されていた川辺良二は次のように書いている。

六月十一日／朝食のお膳をとりいくついでに掲示板を見ると、十時ごろ原爆の乙女が慰問にくると書いてある。意味がわからぬので読み直したけれど、やっぱりそうである。おかしいと思った。原爆の乙女が戦犯を慰問する意味がわからぬ（略）おれにはどうしてもわからないことが一つある。楠瀬<sup>15</sup>という議員と谷本牧師と真杉静枝までが、なぜ彼女らをつれてきたかだ。戦争の悲惨さを知らせ、反省をもとめるためだとは思いますが、彼等は結果がどうなるかを考えてからつれてきたのだろうか。結果はどうだろう。凶々しい年寄りどもは、彼女らとおなじアメリカの非道の犠牲者同士、同情しあつて握手をしたつもりになつてゐるのだ。

さらに悪いことがあるのだ。くらい運命を背負わされ、打

ちひしがれた彼女らが、「神の恩寵」を知るほかに生きようがなかったという話はよくわかる。だから、彼女らが「わたし達は平和を愛する。いまは誰をもうらまない。あなた方のお気の毒な境遇に同情する」といった言葉は、ほんとうの天使の言葉だ。けれども、われわれは果たしてこれでよいのか。

彼女らの天使の心はそれとして尊ぶが、それとは別に、人が本当に平和を愛するならば、平和の敵を憎まなければならぬはずだ。平和の破かい者を憎まないで平和が守れるだろうか。少なくとも戦犯者は、戦争の責任者かその忠僕ということになっている。戦犯者を原爆の乙女が慰問して、たがいに涙を流しあつてよしとする考え方は、何としても納得できない。なるほど七年の日時はたつてゐる。一切の過去は水に流そうとしたい時期にちがいない。だが、それでよいのだろうか。おれ達が最近の社会の動きの中に感じている不安を、この問題はよく象徴しているように思う。戦争への反省、つまり、誰に責任があり、誰がだまされ、誰に犠牲となつたか、誰は許されるけれども、誰は永久に許されないという、厳しい反省を人は忘れてゐるのではなからうか。おそらく、彼女らの戦犯慰問をあつかう商業ジャーナリズムは、「いまは共に犠牲者たち、恩しゅうの彼方で手を取り合う」とでも書くにちがいない。罪を憎んで人を憎まずとか、一切を許すという言葉は、耳ざわりがいい言葉だけに、おそろしいおとし穴があると思う。<sup>16</sup>

「原爆乙女」と「戦犯」との和解は、戦後「日本人」が戦争犠牲者として自己同一化していく過程を象徴する出来事であつただろ

う。広島「原爆乙女」と長崎「原爆乙女」も、合わせ鏡のよう  
にお互いの存在を確認しあいながら「平和の使徒」としての役  
割を自認するようになる。

二十七日開幕した広島、長崎市原爆乙女交歓会第二日目の二  
十八日は午前十時から長崎市引地町労働会館で原爆乙女同士  
の交歓座談会が広島原爆乙女佐古美智子さん、柴田田鶴子さ  
ん、田中博子さん、松原美千代さん、長崎原爆乙女長崎市東  
中町境屋照子さんほか十一名が出席して開かれた。「私たち  
は不幸かもしれない、私たちは平和の使徒だったという唯一  
の誇りを女の悲願のなかに正しく強く生きましよう」と悲し  
みのうちに強く新生への誓いを語り合い午前十一時意義ある  
交歓座談会を終り、一行は長崎観光バスで原爆中心地、原爆  
資料館、如己堂などの観光を行い、午後は観光船蘭丸で薄暮  
にはえた長崎港外の覧遊を行い、楽しい長崎訪問の二日目を  
終った（「私たちは平和の使徒」 原爆乙女の交歓会 二日目  
長崎で「中」五三年四月二九）

「平和の使徒」を自認する「原爆乙女」が、被爆者の代表として  
「原爆スポット」を観光する、この奇妙な光景にも見える出来事  
が、微笑ましい交歓の一コマとして伝えられる。このようにして  
原爆を（怒りではなく）ただ不幸・悲しみとしてとらえ、強く前  
向きに生きようとする朗らかな「原爆乙女」の物語の形成が進行  
してゆく。

「原爆乙女」による許しと和解の作用は、日本国内にとどまら  
ない。「原爆乙女」の渡米治療という出来事には、それが明確に

現れていた。「原爆乙女」の渡米治療は、一九五五年五月から翌  
年年一一月までの約一年半行われた。米国に渡ったのは当時一六  
歳から三〇歳までの女性二五人。これに尽力したのは、米「サタ  
デー・レビュー」誌の主筆ノーマン・カズンズである。カズンズ  
は、それ以前から原爆孤児の援助を行っていたが、流川教会（広  
島）の牧師・谷本清の要請に依って、渡航者の選出、資金の調達、  
受け入れ医療機関や米政府との交渉、「原爆乙女」のホーム・ス  
テイ先の準備など全面的な支援を行った<sup>17</sup>。火傷の跡も生々しい  
彼女らの姿は、米国人にも特別な衝撃を与えたようである。

広島「原爆乙女」二十五名を迎えた米国民の気持ちは複雑であ  
る。原爆はいかにも恐ろしい。だからといって原爆戦争反対  
に徹底する気持ちにもなりきれないのがその心情だ。一般米  
人は新聞、ラジオ、テレビの伝える乙女たちの姿から、傷あ  
とのひどさに驚き罪悪感を味わっているようだ。当地の新聞  
は「医者も驚く火傷のひどさ、片目を失った人、鼻の形さえ  
ほとんど残っていない人」（ヘラルド・トリビューン紙）など  
といずれも四、五段ぬきの写真入りで、はじめてみる原爆症  
患者の姿を伝えている。日本領事館に乙女らに同情する米人、  
日系人から見舞いの問い合わせが次々と来ていることにも、  
衝撃の大きさが知られる。ほとんどの米国人が多かれ少なか  
れ抱き始めた罪滅ぼしの気持ちは、こんどの招待を推進した  
ノーマン・カズンズ氏の「この計画はおそらく借金を少しで  
も返すようなものかもしれない」（サタデー・レビュー誌）と  
いう言葉に示されているようだ。／ニューヨーク・タイムズ  
は十一日の社説で「米国民はこんどの親切を自慢することは

できない。この招待に時間と経費を使った個人に感謝の意を表わすことはできない」と書いてある。原爆の恐ろしさはどのような受け止められているにせよ、広島、長崎の原爆投下は「やむを得なかった」と考える米国人がまだ圧倒的に多い。

ある新聞も「広島原爆投下」は対日戦を早く終らせるためと説明している。ふたたび「やむを得ない」事情で対ソ原・水爆戦におびえながら、自分たちが傷つけた広島乙女たちの手術の成功を祈っている。これが米国人の大衆の矛盾した、だが偽らぬ心境である（「原爆乙女の傷に衝撃 だが：複雑な米国民の心理」「中」五五年五月一四日）

原爆使用の「当事国民」としての後ろめたさと、冷戦最中の核拡散に危機感を募らせる心情とが米国人の心中に併存していたようである。原爆の悲惨さを訴えかけてくる「原爆乙女」の姿と眼前にある核の緊張の高まり。二つの心情が交錯する場において「原爆乙女」はどのように受け入れられていったのだろうか。

原爆乙女たち二十五名が、五月九日ニューヨーク近郊のミツチェル空港に到着してからはやくも九ヶ月、その前例のない「アメリカ生活」から浮き彫りにされたものは、ケロイド症治療に医学的効果をおさめたことは別として「大和ナゲシコの美しさ」を米国側に予期以上に強く印象づけたことである。昨秋までに順次帰国した付添の大内、原田両博士、いまなお残って乙女達の世話を続けるヘレン・横山女史、米側世話役のヒッチグ博士、ノーマン・カズンズ氏ら関係者もこの「事実」だけははっきり認めている。／昨年十月ごろまでは「おかゆをすすすすでも日本の方がよい」と、いささかホー

ム・シック気味だった彼女たちも、対米生活が半ばを越えた今日では、療養生活を通じてのアメリカ生活の味がようやくわかりかけたようだ。そして残された数ヶ月のアメリカ生活を、思い思いに治療生活よりは「修行生活」にふりむけようとしているようだ（「原爆娘のアメリカ生活1 治療・修養に明け暮れ 称えられる」大和なでしこ「中」五六年二月五日）

「原爆乙女」の「心の美しさ」は米国で大変な称賛を受ける。この称揚の裏に、原爆に対する後ろめたさと危機感とのせめぎ合いによるストレスから解放されようとする米国人の欲求が働いていたことは想像に難くない。ただ、それを女性達各人の「心の美しさ」ではなく、「大和なでしこ」という概念に直結する思考には注目する必要がある。このような傾向は、次のような記事にはより顕著である。

乙女たちはすでに「おどおどした」態度から、半年後には日本女性らしい温かさと強さをすっかり取戻した。実際アメリカ流に浮かれた気持ちなど少しもなく個別にあるいはそろって米人にあいさつする場合もいねいに日本式にお辞儀することも忘れず、手術後退院することに「サンキュウ」とお医者さんに述べて日本人のゆかしさを米人たちにしのばせた。こうした物静かさが米人記者の心を打ったことはいうまでもなく、シナイ山病院を全員退院したさいなど「日本人の大臣が来米しても新聞に一段記事そこそこののに、乙女たちが退院したり、方々をたずねると写真付きでかかと扱われる。乙女たちのゆかしい態度に基づいた」民間外交使節「の現れだと思ふ」とささやいていた（「身も心も癒えて 帰国の原爆



乙女 日本娘の良き取戻す」〔中〕五六年一月七日)

ここで、「原爆乙女」が取戻した「日本女性」らしさとは何か、と問うことにはあまり意味がない。問題は「原爆乙女」が取戻した「日本女性」としての美点が米国人に賞賛されていると語られることによって、「日本人」たちの間に調和のある連帯感が喚起されただろうということである。ついに、「原爆乙女」は日本の大臣より米国メディアの関心を集める「民間外交使節」とまで称されるようになった。米国での治療を終えて女性達が帰国したとき、繰返し語られたのは「ふるさとに帰った原爆乙女 いやされた”心の傷”」〔朝〕五六年六月一日)、「心の傷も癒えて 帰国原爆乙女原田さん 第二の人生へ出発」〔中〕五六年六月二八)、「昨夜、渡米原爆乙女我が家へ 心の傷もいえて 家族、見違えるわが子に涙」〔中〕五六年一月七日)と、身体の治療だけではなく、心も癒えたということであった。「原爆乙女」の身体が治癒されるとき、心の傷も癒え、それを見守る「日本人」たちの心も癒え、日米関係も回復する。

「原爆乙女」というと、はじめから「妙齡」の女性であったような印象を抱きがちだが、彼女らがマスメディアに登場するようになった一九五二年から、逆算して考えると、被爆したときには、まだ、その多くが十歳前後の少女であったことがわかる。戦争が終り、街が復興していても、少女達の負った傷は残る。原爆に關して後ろめたい思いをしていたのは米国人ばかりではなかっただろう。そのような場があって「原爆乙女」は、他者を許し和解させる役割を果たす者として物語化されていった。考えなければ

ならないのは、その物語化に含まれる問題である。このような誰も恨まず、責任も問わず、ただ自分の悲劇に耐え、健やかに生きる「原爆乙女」像は、半ば周囲が期待し、半ば本人達が救われるために形成されていったものであるが、それがあいるいびつさをもっていたことは否定できない。それを如実に物語るのが「傷跡がはずかしく 原爆乙女が自殺未遂 海水浴に行けぬを苦し」〔朝〕五五年八月二日)、「原爆乙女自殺 被爆者との結婚に反対され」〔朝〕五六年八月八日)、「原爆乙女、西宮市で自殺」〔中〕五七年三月二九日)等の「原爆乙女」の自殺記事である。彼女たちの自殺記事は、物語化された「原爆乙女」像がやはり一面的なものでしかなかったことを浮き彫りにしている。<sup>18)</sup>

## II 物語を解体する物語―大田洋子「半人間」に見る「原爆乙女」

大田洋子の「半人間」<sup>19)</sup>は、以上に見てきたような「原爆乙女」の物語を解体する物語である。この作品は語り手である作家・篤子が、神経症のために東京の大病院に入院するところからじまると。篤子は自分の神経症の原因について次のように語る。

「わたくしも、原民綺のようになりかけております。その一歩手前みたいな気がしてならないんです。」

医師は前年の晩春に自殺した詩人のことを知らない様子をした。原民綺がおのれの体験の原子爆弾の記憶の脅迫と、朝鮮動乱から感得せずにはおかれぬ戦争拡大への不安から、自己をうしないはじめて、自殺したのであることを、篤子は話した。

作品は一九五二年の出来事として語られているが、篤子は前年に自殺した原民綺（いうまでもなくモデルは原民喜）と不安を共有しているという自覚がある。その不安とは、朝鮮戦争の勃発と日米安保条約の締結、警察予備隊（後、保安隊から自衛隊）の発足にともなう日本の実質的な再軍備といった状況から、再び日本が参戦することになるのではないかというものである。そのことが特に二人の神経を刺激するのは、どちらとも被爆したときの記憶に囚われ続けているからであるという。この点に注目すれば、篤子の不安神経症は「原子爆弾症」というべきものであった。しかし、医師はそのようには見なさない。

むろん医師たちにとって、篤子は形の上に原子爆弾症と無関係な患者であった。篤子に原子爆弾症の徴候は出ていないからである。

篤子の神経症はその原因を理解されないまま悪化していく。様々な幻覚や幻聴、記憶違いに溢れている篤子の語りは、不気味なほどであるが、篤子に言わせれば異常なのは彼女だけではない。

「先だって房田先生もいらつしやいましたわね。ほとんどの人が精神症的だったこと。三人のうち、二人まではおかしいのではないでしょう。わたくしはそう思います。」

戦争の拡大を予感させる状況において、平然としていることが正常なのか。正常と異常とを相対化する篤子によって「原爆乙女」のエピソードは次ぎように語られる。

あの部屋のベッドに、あわれな幾人かの娘が横たわっているのである。顔いちめんを焼いた火傷の娘たちは、あの高い窓の内側に、「こんにちの心理」を病気にまで押しすすめた弱

小な自分は、このこの低い部屋に。娘たちは「原爆娘」という、見世物じみた名称を背負わされていた。東京にきて大医学病院で診てもらったが、幾度かの診察の合間に、彼女たちは巢鴨に向かいA級戦争犯罪者に見舞いをのべた。A級戦犯に向かつて、原子爆弾にはほとんど全身を焼かれた娘らが（お気の毒です）と挨拶し、泣き伏したという情報は、こっけいであった。

篤子の胸には、悲しみがこみあげていた。魂をえぐるようなかなしみであった。日本に原子爆弾が使用されたことを、政治的にしか見ることはできないが、それならあの哀しい姿に変わった娘たちについて、どうすればいいのだろう。顔や手足の形相をもとにかえす。医学的な奇蹟としてそれを半ば果たすかも知れない。けれどもふたたび彼女たちの心はもとにかえらない筈である。篤子はしばらく嗚咽していた。

東京の病院で治療を受ける「原爆乙女」と「戦犯」を慰問する「原爆乙女」という実際に行われた出来事についての言及である。篤子は、「戦犯」と「原爆乙女」との和解を嘲笑し、身体的な外傷を治療しても、「原爆乙女」の心はもとにはかえらないと断ずる。篤子がそのような感じを抱くのには理由がある。

九人上京した娘のなかの一人を知っていた。前年郷里の街でその娘の家を訪ねたとき、篤子は娘の家の上がりがまちに泣き伏した。見るに耐えぬ奇怪な顔であった。手足が焼けちぢんでいた。二十歳の娘の額のところだけ、ほの白く、焼けなききれいな皮膚が残っていた。

「前髪をさげていましたから」

十四歳の少女が、前髪の下の僅かな皮膚を残し、あとはみんな茶褐色にやけただれたのだ。娘は曲がった指で氷をかいていた。氷水の店を自分で出していた。

「お母さんは、あたしがこんなになつてから、あたしを憎んでいます。姉と弟にだけ愛情をそそいでいるんですよ」

娘は篤子の泊っていた家に、毎日のようにやってきた。篤子は一緒にごはんを食べた。娘の下唇は唇の形をうしない、歯茎をむきだしにして下に大きく垂れ下がったまま、とじることができなかつた。食べるものはしからこぼれ出て、膝に落ちた。篤子は吐きそうになつた。娘と食事をするたびに、吐気がきたが、無理矢理たべた。

篤子の知る「娘」は、一見、周囲から同情によつて東京に治療に來ている恵まれた「原爆乙女」のように見えるが、実は母親からも疎まれてゐる。「娘」の風貌についての細部にいたる綿密な描写は、マスメディアで報じられるそれとは決定的に異なつてゐる。篤子が「娘」と対面して吐気をもよおしてしまうのは、彼女に同情心が薄いせいではない。

娘が東京にきて宿についたとき、篤子に会いたいと云つて電話をかけて來た。來たら篤子のところに泊るといふ約束が手紙であつた。しかし娘は來なかつた。娘たちの引率者の牧師が、篤子の良人をマルキシストだと云い、篤子も危険だから近づいてはいけないと云つたことを、篤子はのちに聞いた。篤子はすでに神経異常のために外出できなくなつていた。娘たちの宿舎にも、病院にも出向けない状態だつた。

「真夜中の廊下で泣いてても、しかたないでしょ。ねえ、べ

ツドに帰りましょう」

牧師が肩に手をかけた。

「牧師のくせに」

篤子は牧師の手をとつた。

「私はあの娘一人のためにも、たたかうつもりなの。でも顔を見るのがこわくて、行けなかつたのよ。毎晩、寢床のなかで、何時間も泣いていたの」

眠りをさまたげられる牧師は、眉をよせて怒つた表情をしていた。

「自分の娘でもないひとのことを、そんなに気にすることないじゃ、ありませんか。そんなことで、じぶんのからだまで壊すなんて、つまらないことだわ」

「——つまらないの？あんたも牧師だわ」

篤子が「娘」を恐れるのは、それが深く原爆の跡をとどめてゐるからである。篤子は「娘」を介して原爆と向き合はされる。そのような篤子と「娘」とを疎隔させるものは、引率者である牧師が従う反マルキシズムの風潮である。この風潮がレッドパーズと朝鮮戦争の余波であることは言うまでもない。篤子はただ牧師を個人的に非難してゐるのではない。篤子が欺瞞を感じるのは、戦火の危機を生じさせてゐる風潮に従つたまま、「原爆乙女」の支援をすることができると感じる感覚に対してである。「原子爆弾症」として神経を病む者には「娘」の存在は重い。「娘」に向き合つてなお、恐れずにいられる方が異常なのではないか、という訴えがここにはある。

「半人間」は、入院した篤子の神経が癒されなままに結ばれ

る。

「うちの竹乃、生きてるかしら。あなた、知らない？」

「生きてますよ。ちゃんと」

月夜のために、散歩の時間をのばしている患者と付添婦たちが、篤子たちの前をいく組もおった。

一九五二年も九月中旬だった。

篤子が最後まで関与しようとするのは、自分を自殺に誘うような病的な女中・竹乃である。篤子は癒されることなく、「異常」に連帯し続ける。神経を病み癒されない篤子が、「原爆乙女」たちも癒されぬと訴える不気味な語り。決して調和に到達することのない不安の物語。「半人間」が問題化しようとしていることは、「原爆乙女」の物語化をコンテキストに置いて、それとの差異と抵抗に注目するときに鮮明に浮かび上がるのである。

## 注

\*1 「原爆乙女」という呼称の他に「原爆娘」という呼称が用いられることもある。両者の使い分けは、特になされてはいない。記事の数としては「原爆乙女」として報じたものが多い。

\*2 ただし、占領軍の検閲組織、CCD(Civil Censorship Detachment)が解散するのは一九四九年一〇月である。検閲が廃止された後も原爆について報じられなかった事情を堀場清子『原爆 表現と検閲』(一九九五年八月 朝日出版社)は、レッドパージと朝鮮戦争の開始が言論に圧迫をもたらしたから、と説明している。

\*3 山手茂「被爆者の生活」(『原水爆被害白書』一九六一年七月 日

本評論新社)「被爆青年、とくに女性の多くは、就職ができず、家にとじこもりがちであり、そのため交友関係もせまく、恋愛結婚の可能性もとぼしく、しかも仲人結婚も困難である、という状態におちいり、孤独と不安に苦しんでいます。」

\*4 引用文の出典の表記は以下の通り。

「朝」：「朝日新聞」(東京版)／「中」：「中国新聞」／「長」：「長崎日日新聞」※

※ 「長崎日日新聞」：明治四四(一九一一年)「長崎新報」(明治三二年創刊)より「長崎日日新聞」に改題。昭和三四(一九五九)年に「長崎民友新聞」と合併して「長崎新聞」と改題。

なお、引用文の傍線は全て論者が付したものである。

\*5 例えば、「皆様に恩返しを 東大分院で感激を語る」(「朝」五三年一月一六日)など。

\*6 例えば、「原爆乙女大阪へ着く きょう阪大病院などで診察」(「中」五二年一二月九日)など。

\*7 「原爆一号」という呼称の由来は次のように語られている。「原爆第一号患者の呼称がついたのはほかでもない、昭和二十一年の夏、アメリカからジャーナリスト、軍人ら約六十名が原爆の被害を視察しに来広した。東大教授都築博士の案内で日赤を訪れた一行が吉川さんの背中のケロイドを見てかたずをのんだ「生存者の患者中、ナンバー・ワンだろう」という声が「ライフ」に載り、日本のジャーナリズムが取り上げるに至った、いつの間にかこの呼び名が吉川さんに冠せられるようになってしまった」(「原爆一号 言うなれば時

の主演 吉川清氏」「中」一九五三年二月二四日)

- \*8 一九〇九年六月二七日、香川県生まれ。日本基督教団牧師。関西学院神学部卒業後、日本メソジスト教会の築港、鹿児島県分、加治木の諸教会の牧会に当る。四三年に広島流川教会牧師に就任。四五年原爆の爆心地から三キロメートルの知人宅で被爆。五〇年広島流川教会にヒロシマ・ピースセンターを設立、原爆で傷ついた少女たちや原爆孤児の救済に取り組む。米国各都市を巡って資金集めに奔走し、米国のジャーナリスト、カズンズらの協力により、米国人による原爆孤児への経済的援助のための精神縁組運動を推進。五五年、二五名の被爆少女を連れて渡米、一年にわたってケロイド治療を受けさせた。広島文化平和センター理事長などを務めた。

『日本キリスト教歴史大事典』(日本キリスト教歴史大事典編集委員会編 一九八八年二月 教文館)を参照した。

- \*9 「原爆乙女を涙で見舞う 賀茂村の婦人ら」「中」五三年三月一三日)など。

- \*10 「広島への手紙、変り種三編 原爆乙女と結婚したい 白血病はイオン療法で」「中」五五年八月二四日)

- \*11 「原爆孤児を養女にしたい Xマスを前に愛の手 京都で旅館を営む老夫婦」「中」五五年一月一五日)

- \*12 別の記事に作曲家・小林美千夫について次のように紹介されている。「戦犯として巢鴨に服役中の三鷹市牟礼一三八六小林金作(三四)は昨年秋広島のを「原爆乙女」から「原爆乙女の歌」の作曲を依頼されていたがこのほど完成、近く東京(場所は未定)で発表会を行う。小林氏は憲兵曹長として比国にいて、現在終身刑の身だが、おさないころから音楽が好きで、比国当てもギターははな

したことはなかったという」(「原爆乙女の歌」を作曲 戦犯終身刑の小林氏近く発表)「朝」五三年二月六日)

- \*13 歌詞は「広島長崎などで発表会 原爆乙女の歌できる」「中」五三年二月八日)から引用した。

- \*14 歌詞は「原爆乙女の歌をレコード化 印税は障害者の治療費に長崎市で計画」「長」五三年三月二〇日)から引用した。

- \*15 「楠瀬常猪：東京商大卒農商務省に勤め特許局総務部出願調査各課長商務局商務課長臨時物資調整局庶務課長を歴務昭和一四年仙台鉱山監督局長興亜院華北連絡部経済第二部長商工省燃料局長官近畿地方総監督府副総監を経て同 20 年広島県知事となり中国地方行政事務長官を兼ね同二二年広島県知事に当選同二五年参議院議員当選。」

(広瀬弘編『昭和人名事典』西日本編 1956年11月 帝国秘密探偵社)

- \*16 「原爆乙女の慰問」「壁あつき部屋―巢鴨BC級戦犯の人生記」(一九五三年二月 理論社)

- \*17 「原爆乙女」の渡米治療の経緯については、中条一雄『原爆乙女』(一九八四年三月 朝日新聞社)に詳しい。

- \*18 「われわれ被害者はなんといいっても弱い存在だ、極端にいうとおぼれるものはワラをもつかむ」という心の状態にいる、少しでも温情をたれる人がいればすぐなびいてゆく、二十年の八月六日が遠のけば遠のくほど、見せかけの温情を売名の具に利用しようとするヤカラがやたらにふえてくる」とガイタンする、彼によれば「昨年からはじめられている東京、大阪での原爆乙女の治療はある個人の売名以外の何者でもない。顔のケロイドを治療することは決して悪いことではないが、あすの生活にも困っている多くの

悲惨な被害者は選ばれた彼女たちを見てどう思うだろうか、また知らない人は原爆乙女は十人くらいしかいないのだ、という風に考えるかもしれない」ということになる」（原爆一号 言うなれば時の主役 吉川清氏「中」五三年二月二四日）

\*19

初出は、「世界」一九五四年三月。初版は、『半人間』一九五四年五月 講談社刊。

附記 本稿は「第三回 原爆文学研究会」（二〇〇二年六月二九日、於

九州大学）での研究発表をもとに、新たに論としてまとめたものである。質疑応答を通じて助言をいただいた方々に謝意を表したい。

質疑応答においては、「原爆乙女」の物語性をあばくだけではなく、それによって癒されることを求めた背景にももつと注目すべき、占領軍による検閲が行われていた期間への目配りの必要、新聞記事を注解する作業の必要など、多くのご指摘をいただいたが、研究発表と論文執筆時期との間隔が短かったため、ほとんど本稿には活かすことができなかつた。今後、残された課題として追求していきたい。